



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3160号 2016.8.1 発行

### 障害者が働くコンビニ 自立を目指し病院内に

中日新聞 2016年8月1日



生き生きと接客する「ユーザースタッフ」。障害のある子どもたちの希望でもある＝東京都板橋区の心身障害児総合医療療育センターで

一般企業への就職が難しい障害者に、働く場所を提供する「就労継続支援A型事業所」として、東京都の医療機関内にコンビニエンスストアがオープンした。運営会社によると、同事業所でのコンビニ経営は全国初という。新しい取り組みを取材した。

東京都板橋区の心身障害児総合医療療育センター。手足が不自由だったり、心身に重い障害があったりする子どもらのための施設で、外来やリハビリ、

入退院などで日々、七百人以上が訪れる。四万平方メートルを超える敷地には、病棟のほか、特別支援学校や職員の宿舎も。国の施設のため、これまで営利目的の売店はなく、自動販売機のみだった。

七月下旬、同センター内にコンビニ「ポプラAプラス療育センター店」が開店すると、患者や家族、職員らでにぎわった。都内の母親（37）は「入院中の長男と一緒に病院に泊まっているので、ちょっとした買い物に助かる」。お菓子を楽しそうに選ぶ車いすの子どもたちの姿もあり、同センターの真野寛・事務部長は「入院中の障害者には買い物の訓練にもなる」と話す。

コンビニを運営するのは、知的、精神、発達障害者の就労支援事業を展開する「フェスティーナレンテ」（板橋区）。レジに立つ女性（37）には発達障害があり、就労に必要なマナーやパソコン技術を学べる同社ビジネススクールの元受講生だ。「（混むと）ちょっと焦っちゃうけれど、働けるのが楽しいです」と笑顔。そんな働く様子を見て、長男（4つ）が入院する母親（34）は「将来の自立に向けて参考になるし、働く場所があるのは親としても励みになる」と言う。

店内は車いすが二台通れるように、広めのつくりにした。主に接客を担う障害者は十人を雇用。職員は四人で、やはり広めのレジのカウンターでは、後方からサポートする。

フェスティーナレンテの佐藤悟社長は「私も障害がある子の親。一番の思いは、企業の戦力として障害者が雇用され、働き続け、経済的に自立した生活ができること」。

構想から開店までに三年半。大手コンビニには「事業収益が見込めない」として出店要請を断られ続けた。地元の信用金庫の紹介を受け、障害者に理解があり、店舗運営を任せられる人材を探していたポプラ（広島市）と、フランチャイズ契約にこぎ着けた。

佐藤社長は「就労の機会や訓練といった福祉の側面だけではなく、収益が得られる事業として成り立たせ、A型事業所に一石を投じたい。ビジネスモデルとして特許を申請中で、この取り組みが全国へ広がってほしい」と話した。

◆国が給付金、最低賃金も保障 「就労継続支援A型事業所」

就労継続支援A型事業所は、一般企業での就労が困難な障害者が、雇用契約を結び、給料をもらいながら、就労に必要な訓練を受ける。事業所には、雇用契約を結んだ利用者1人当たり1日約6000円の給付金が国から入る。給付金は職員の人件費や経費などに充て、利用者には事業収益から最低賃金以上を支給する。

厚生労働省によると、A型事業所は、ここ数年で増加傾向にある。全国で3158カ所（今年3月現在）で、6年前の約6・5倍。社会福祉法人のほか、NPO法人や民間企業も参入し、現在は半分が営利法人の経営になっている。

事業所の中には、障害者の希望を無視して単純な作業しかさせず、短時間勤務にして賃金を減らすなど、不正が疑われるケースもあり、厚労省は昨年9月と今年3月、都道府県に指導の徹底を求めた。

障害者の就労問題に詳しいNPO法人共同連（名古屋市）の斎藤縣三（けんぞう）事務局長は「給付金目当ての事業所があるなど問題も多く、コンビニなどきちんとした事業を展開するケースは珍しい」と話した。（発知恵理子）

## 介護の現場 ゲームで体験...人材不足解消へ企画 読売新聞 2016年08月01日 山梨

介護・福祉職の魅力をゲームを通じ知ってもらおうと、甲府市北口の県立図書館で31日、高齢者や障害者になりきったり、介護職を体験したりするゲーム形式のイベント「ザ・シックスセンス～医療福祉系リアル人生ゲーム～」が開かれた。

医療福祉関係のイベントなどを開いているNPO法人「U b d o b e（ウブドベ）」（東京都）が企画し、県社会福祉協議会が主催。2025年には介護職の人材が全国で約37万人分不足するとされており、ゲーム形式で若者に興味を持ってもらい人材確保につなげたい狙いがある。

来場者はルーレットを回して止まったマス目の指示に従いゴールを目指す。たとえば「ボランティア活動に参加し、介護施設に行く」のマスでは高齢者が立ち上がるのを補助する方法を学び、「脳の血管が詰まり手足に障害が残る」のマスでは足に計6キロの重りをつけて歩く体験をした。

スタッフの1人で甲府市で介護福祉士として働く江連若菜さん（22）は、車いすの利用者をベッドに移動させる動作を紹介。「実際に介護の仕事を見せ身近に感じてもらうと思った。大変だと思われがちだが、喜びも大きい」と力を込めた。

この日は約180人の若者らが来場。北杜高校2年の岡田結里香さん（17）は、「重りをつけてみて高齢者が歩くのは大変だと感じた。介護の分野に改めて興味が湧いた」と話した。

## 「コバケン」と障害者のハーモニー 茅野・みずなら音楽祭



信濃毎日新聞 2016年8月1日  
障害のある和太鼓奏者（手前の2人）を指揮する小林さん（中央）

指揮者小林研一郎さん（76）が音楽監督を務める蓼科高原みずなら音楽祭は31日、茅野市民館で開いた。障害者を奏者や客席に招く演奏会「コバケンとその仲間たちオーケストラ」があり、小林さんを慕う国内外の約100人でつくるオケが、クラシックの名曲などを情感豊かに奏でた。

長崎県を拠点とする障害者の和太鼓団体「瑞宝太鼓」に所属し、それぞれ聴覚や軽度知的障害がある2人は、小林さん作曲の管弦

楽曲「パッサカリア」の一曲「夏祭り」で協演。聴衆を沸かせた。

県内5高校の吹奏楽部員ら約30人はオケと共にベルディのオペラ「アイダ」の「凱旋（がいせん）行進曲」などを披露した。

小林さんは4月、県文化振興事業団が新設した「芸術監督団」の芸術監督に就任。小林さんはこの日の演奏会で、県内での活動範囲を広げるため、来年から「コバケンとその仲間たちオーケストラ」を茅野市と、セイジ・オザワ松本フェスティバルがある松本市の両市以外で開く考えを示した。

## さがみ虹色ネット 発達障害支援10年 記念講演 相模原 / 神奈川



毎日新聞 2016年7月31日  
10周年記念講演会で「診察室からみた学校之力」と題して話す細田医師

相模原市で発達障害児の支援活動をする教師らのグループ「さがみ虹色ネット」（代表、田中多輝子・市立谷口台小校長）の設立10周年を記念した講演会が30日、同市民会館であった。発達障害にかかわる医療や教育、心理の専門職を務める約100人が参加した。

講演したのは、十数年にわたり発達障害児の教育に携わっている元小学校長で相模女子大教職センター特任教授の大里朝彦さんと、1996年から発達障害児や重度重複障害児への医療や保護者支援を続ける医師で相模原療育園施設長の細田のぞみさん。

大里さんは、発達障害のある「その子にとって、その時に良い教育」を実践してきた経験を話し、「障害があっても可能性がある。大切なのは命と思いやり」と強調。細田さんは「常に医療を必要とする子どもがいる。教育は命をはぐくむ尊い営み」と話し、「障害のある子どもだけでなく、家族の生活を支える」ことの大切さを訴えた。【高橋和夫】

## 【相模原殺傷事件】犯行予告などの情報共有に課題残す



福祉新聞 2016年08月01日 編集部  
施設前で報道陣に囲まれる黒岩知事（荻原芳明撮影）

相模原市にある神奈川県立の障害者支援施設「津久井やまゆり園」に7月26日未明、刃物を持った男が侵入し、知的障害者19人を刺殺した。神奈川県警は出頭した元同施設職員、植松聖容疑者（26）を殺人未遂と建造物侵入の容疑で逮捕。植松容疑者は「ナイフで刺した」と容疑を認めている。刃物を

使った大量殺人事件としては戦後最悪とみられる。黒岩祐治・神奈川県知事、同施設を運営する社会福祉法人は27日に県庁で記者会見を開いた。両者の話を総合すると、犯行予告などの情報が関係機関の間で共有できていなかったことが露呈。福祉施設を舞台とした惨劇は、情報共有の在り方に課題を残した。

死亡した19人の氏名は遺族の意向で非公表。男性が9人、女性が10人、障害支援区分別では最重度とされる区分6が15人、区分5が4人であることを県が公表した。

県が設置した定員160人（短期含む）の同施設は2階建てで、社会福祉法人かながわ

共同会（本部＝同県厚木市）が2005年から指定管理者として運営。事件当時、知的障害者ら157人が入所し、職員8人と警備員がいた。植松容疑者は居住棟1階の窓ガラスを割って入ったと供述。職員2人を含む26人が重軽傷を負った。

かながわ共同会によると、植松容疑者は12年12月から同施設で勤務を開始。周囲には「明るく、伸びしろのある青年」に見えたが、健康保険証を3回紛失したり、入所者の手の甲に落書きをしたりするなど不可解なことが徐々に現れた。背中に入れ墨があることも同僚が発見し、20歳の時に入れたものだと分かった。

植松容疑者をめぐる経緯		※時事通信より
2012年	12月1日	「津久井やまゆり園」に非常勤職員として勤務
2013年	4月	常勤職員として採用される
2015年	6月28日	JR八王子駅付近の路上で男性に暴行、1週間のけがをさせる
	12月10日	警視庁八王子署が傷害容疑で書類送検
2016年	2月14日	衆議院議長公邸を訪れ「手紙を渡したい」と求めるが受け取りを拒否される
	15日	衆議院議長公邸を再度訪問。警戒中の警察官が手紙を預かる
	18日	施設職員に「重度障害者を殺す」と発言
	19日	「危険な考え」とする施設側に「自分は間違っていない」と主張。退職願を提出。面談した神奈川県警津久井署員に「重度障害者の大量殺人は、日本国の指示があればいつでも実行する」。「そう病」と診断され緊急措置入院
	22日	再診察で「大麻精神病」「妄想性障害」などと診断される。措置入院に
	3月2日	措置入院の必要性は消失したと診断され退院
	7月26日	午前2時ごろ施設に侵入。同45分ごろ施設から110番。同3時すぎ津久井署に出頭

今年2月には衆議院議長公邸（東京都）を訪れ、障害者の殺害を予告する手紙を警戒中の警察官に手渡した。同じ頃、同施設での業務中に障害者を殺すなどと発言し、自ら退職願を出した。



同施設は退職後の植松容疑者が施設内に入らないよう警戒。警察と連携しながら防犯カメラを設置したり、警察への特定通報システムに登録したりしたが、そうした対応を県には報告しなかった。左から、かながわ共同会の米山勝彦理事長、赤川美紀常務理事、津久井やまゆり園の入倉かおる園長。会見は約2時間に及んだ（27日、神奈川県庁）  
**偏見の助長を懸念**

犯罪史上類を見ない被害が生じたことを受け、福祉団体は相次いで声明を出した。

植松容疑者が相模原市長の命令で今年2月に措置入院したとの報道をめぐっては、精神疾患の当事者支援に取り組むNPO法人地域精神保健福祉機構（コンボ）が26日、当事者への偏見を助長しないよう配慮した報道を報道各社に緊急要請した。

全国手をつなぐ育成会連合会は同日、障害者向けの声明で、植松容疑者が「障害者はいなくなればいい」と話したとする報道に言及。「そのことで不安を感じる人もたくさんいると思います。そんなときは身近な人に不安な気持ちを話しましょう。私たちは一人ひとりが大切な存在です。安心して堂々と生きてください」と呼び掛けた。

同施設が入会している日本知的障害者福祉協会も同日、会員向けの声明を発表。事件へ

の遺憾の意を示したほか、リスク管理体制の再点検や利用者の不安への対応に努めるよう呼び掛けた。

津久井やまゆり園の正面外観。「立入禁止」のテープが張られている

措置入院見直しへ

厚生労働省は26日、都道府県などに対し、社会福祉施設の入所者の安全確保に努めるよう求める通知を发出。警察、ボランティア、地域住民との連携強化などを促した。

27日に同施設を訪問した塩崎恭久・厚労大臣は記者団に「措置入院の解除について、今回は大麻使用のフォローアップができていなかったという指摘もある。よく考えないといけない」とし、検討する考えを示した。

◇黒岩知事の話＝指導監督する立場から、心からおわびする。犯行予告や措置入院、大麻の陽性反応といった容疑者をめぐる報道があるが、関係機関からの情報提供はなく、県は把握していなかった。情報共有に課題があったとも考えられる。徹底的に検証し、再発防止策を講じたい。措置入院は人権にかかわる問題なので、慎重に取り組みなければならない。専門家を交えながらあるべき姿を模索したい。指定管理者制度の在り方も検証する必要がある（26日、27日の記者会見）。

◇かながわ共同会の話＝尊い生命が失われ、強い怒りを禁じ得ない。元職員が行ったとはいまだに信じられない。国民の皆様は、福祉に対する信頼を揺るがせたことを深くおわびする。被害に遭った入所者のご家族には個々の事情に応じて誠意をもって対応したい。現在、入所者は敷地内の体育館などで過ごしているが、一部は法人内の他施設に移る方向で調整している。容疑者から衆院議長への手紙は実物を見ていない。容疑者の大麻の陽性反応も報道で知って驚いた（27日の記者会見）。



## コラム 風紋 未然防止

中日新聞 2016年8月1日

元警視庁捜査一課長を招いた記者研修会で「警察が犯人逮捕だけしていればいい時代は終わった」との言葉にうなずいた一週間後に、障害者殺傷事件が起きました。

衆院議長公邸へ手紙を持参したため、神奈川県警や相模原市は「襲撃予告」ともいうべき容疑者の特異な考えを知っていました。措置入院も実施されました。それでも事件を防ぐことはできませんでした。

ストーカー殺人や子どもの虐待死など、関係機関があと一歩踏み出していれば助けられた命がいくつもあります。いま一度、悲劇を未然に防ぐ方策を社会全体で考えねばなりません。（編集局長・岡安大助）

## 「なぜ」向き合うこと必要 長崎新聞 2016年8月1日

「共同作業で『なぜ』に丁寧に向き合うことが必要」と語る横湯さん＝佐世保市労働福祉センター

佐世保市の高1女子同級生殺害事件から2年に合わせ、「子どものいのちと心を守る講演会」が7月31日、同市稲荷町の市労働福祉センターであった。講演した教育臨床心理学者の横湯園子さんは、子どもが抱える問題に「医療や福祉の専門家、市民が一方的ではなく、当事者の信頼を得ながら共同作業で『なぜ』に向き合うことが必要」と訴えた。

横湯さんは、加害少女が小学6年時に起こした給食異物混入問題



に触れ「父親の反対で難しかったとは思いますが、共同作業でカウンセリングの継続を働き掛けることができなかつたか」と指摘。大人の役割について、朝食を毎朝食べさせてくれた小学校の養護教諭の言葉を支えに育った女性の話を取り上げ「できることは日常にたくさんある。それが殺人を防いだりすることにつながるのでは」と強調した。

講演会は、事件を受け発足した、市内の子育て支援団体などをつくる「子どものいのちと心を守る市民ネットワーク」（山北眞由美代表）が開いた。約60人が参加。山北代表は「子どもたちの心の中にためているものを少しでもはき出せるように私たち大人が見守っていかないといけない」とあいさつした。

## 山梨) 福祉を楽しく体験 県立図書館でリアル人生ゲーム 朝日新聞 2016年8月1日 マス目に沿って進む参加者たち=甲府市北口2丁目の県立図書館



福祉の仕事などを体験するイベント「THE Six SENSE～医療福祉系リアル人生ゲーム～」が31日、甲府市北口2丁目の県立図書館で催された。県社会福祉協議会が主催し、家族連れや学生など約170人が参加した。

館内イベントスペースに人生ゲームのようなマス目が設けられ、車いすに乗った人と介助者の2人1組でルーレットを回して進む。結婚や出産などの他に「ある日突然、パートナーが失明し視覚障害となる」などのマスがあり、アイマスク

着用の食事などそれぞれの障害がどのようなものを体験できる。現役の介護福祉士らによる介助のレクチャーもあった。

楽しみながら福祉の仕事や障害への理解を深めてもらおうと、音楽やアートなどを通して医療福祉業界の課題解決に取り組む東京都のNPO法人Ubdobe（ウブドベ）が企画した。介護福祉士の資格を持つ同NPO理事の中浜崇之さん（33）は「福祉の視点や感覚を取り入れると生活が豊かになる。福祉の仕事は楽しくてカッコいいものだということを若い人にもっと知ってほしい」と話す。

## 老いても共に過ごしたい 読売新聞 2016年8月1日

◇介護施設 69年目結婚式

◇紀の川 「2人部屋」増加期待

3人の娘らが企画した結婚式で、笑顔を見せる昭雄さんと日子さん（紀の川市のデイサービスセンター「雅」で）

結婚して69年目になる老夫婦が、紀の川市下丹生谷のデイサービスセンター「雅」で結婚式を挙げた。中沢昭雄さん（89）と日子さん（87）。数年前から夫婦共に認知症を患い、要介護認定を受け、約1年前から夫婦で同じ施設で過ごしている。二人を支える3人の娘と施設職員のはからいで、若い頃、結婚式を挙げられなかった二人に式をプレゼントした。6月に施設内で行った式にモーニングコートと白いドレスで登場した二人は「とてもうれしい」とはにかんだ笑顔を見せた。（下村公美）



二人とも紀の川市出身。昭雄さんが日子さんに好意を抱いて交際が始まり、終戦から3年後の1948年、結婚した。昭雄さんは鉄道会社などに勤務し、地元で3人の娘を夫婦で育て上げた。40年ほど前に末の娘が近所に嫁いで以降、再び夫婦だけの暮らしとなり、

時折、訪ねてくる多くの孫に囲まれて穏やかな日々を過ごした。

昭雄さんに認知症の症状が出始めたのは4年ほど前。自覚のないまま徘徊するようになり、一人で外を出歩き、転んでけがをした。日子さんは10年ほど前に心臓病の手術をして体力が低下。昭雄さんに続いて、物忘れなど認知症の症状が出るようになった。

二人とも体調の変化で記憶があいまいになる時もあるが、ふだんは日常会話にも困らない。互いを「全部、好き」（昭雄さん）、「穏やかで優しいところが好き」（日子さん）といつくしむ。

近隣に住む3人の娘が交代で面倒を見てきたが、「やはり専門の人の支えがあるとありがたい」と1年ほど前から1週間のうち6日はデイサービス施設で寝泊まりする「お泊まりデイ」を活用し、1日は自宅で家族が介護する態勢を選んだ。

当時は昭雄さんに比べると日子さんの症状がやや軽く、夫婦そろって特別養護老人ホームに入ることはできなかった。それが「雅」なら施設のスペースを有効活用し、2人部屋を確保することが可能で、介護保険の制度上の問題をクリアすることもできた。

県内のある地域包括支援センターの担当者は「介護福祉施設で2人部屋を設けているところは実際はごくわずか」と話す。夫婦がそろって同じ時期に同等の介護が必要になるケースは、高齢化時代とは言え、なお限られているためだ。それでも介護が必要になった夫婦が同じ施設で一緒に暮らしたいと要望する例は今後増えるだろう。

今回の結婚式開催には、家族や施設スタッフの「年老いても、介護が必要になっても、共に暮らしたいと思う夫婦がいることを地域にアピールし、介護施設などで新しい受け入れ態勢を模索する動きが出てきてくれれば」という願いが込められていた。

6月21日に行われた式には家族や施設利用者、スタッフら約20人が参列。「結婚行進曲」をBGMに夫婦が入場し、会場は拍手に包まれた。娘3人が「結婚式おめでとう。お父さん、お母さんのように夫婦、そして家族みんな元気で仲良く過ごしたいです」「孫の面倒をみてくれてありがとう。今、自分が孫をみる立場になってその大変さがよく分かる」と手紙で感謝の気持ちを伝えると、昭雄さんは目に涙を浮かべた。

花束を贈られた日子さんは「こんなに年をとっているのに（結婚式を挙げさせてくれて）ありがとうございます」とあいさつした。

## 自閉症児らの自立支援考える 岡山で児童精神科医師講演セミナー



山陽新聞 2016年7月31日

### 自閉症児らの自立支援に関する講演があったセミナー

自閉症児らの自立支援セミナーが31日、岡山市中区桑野の岡山ふれあいセンターであり、よこはま発達クリニック（横浜市）の児童精神科医師・吉田友子さんが「その子らしさを生かす子育て」と題して講演した。

吉田さんは「場の空気が読みにくい」「細部にこだわる」といった自閉症の特徴について「脳のタイプがそうだというだけで、欠点ではない」と強調。社会に適応する技術を身に付け、福祉・医療サービスで不便を補う必要性を訴えた。

自閉症であることを本人に告知するタイミングにも触れ、初診でいきなり告げたり、その可能性を指摘したりするのは「突然の宣告になり、家族も準備ができていない。告知の前、できる支援を始めるべきだ」と述べた。

講演を聴いた岡山市の女性（45）は「高校生の息子に自閉症がある。講演を参考に、今後親としてどう支えていくべきかを考えたい」と話した。

NPO法人県自閉症児を育てる会が主催し、保護者ら約300人が聴講した。

## 部活動の適正化 教員の負担軽減は急務だ

西日本新聞 2016年08月01日

学校教員の長時間勤務を軽減するため、文部科学省が休養日を設けるなど、部活動の適正化対策を打ち出した。教育課程ではない部活動に過剰に時間や労力を奪われ、教員が疲弊してしまっただけでは本末転倒だ。見直しは急務である。

対策は以下のような内容だ。

教員や生徒、保護者などを対象に部活動の実態を全国調査する。併せて、スポーツ医学の視点から生徒の発達や生活に適切な練習時間や休養の在り方を研究する。その成果を踏まえ、休養日の設定を含むガイドラインを策定する。方向性に異論はない。生徒の視点に立った検証も評価できる。部活動の行き過ぎは、教員だけでなく、生徒にも負担となる。

経済協力開発機構（OECD）の国際調査（2014年度発表）によると、日本の中学教員の仕事時間は34カ国・地域の中で突出して長い。特に課外指導は週7・7時間で全体平均2・1時間の3倍以上に及ぶ。運動部の顧問になると、大会の運営や引率で土日がつぶれることも珍しくない。

文科省は来年度から休日に部活動を指導した中学教員の手当を増額するという。だが、多くの教員が求めるのは休日の確保だろう。

文科省は1997年にも、中学の運動部は週2日以上、高校は週1日以上休養日設定を促している。これが、守られていない。まず、全ての学校が教員の負担軽減を喫緊の課題として受け止めることが必要だ。そうでなければ、新たなガイドラインができて実効性は期待できない。部活動には、生徒の責任感や連帯感を育む効果がある。だからこそ、教員は情熱を注ぐ。保護者も学校に充実を期待しがちだ。

部活動の原則は生徒の自主的・自発的な参加だ。ところが、参加を強く促す学校は少ない。内申書への影響を懸念して参加する生徒もいるという。

学校の部活動はどうあるべきか。地域で担えることはないのか。教員の負担軽減とともに、こうした議論も深めていきたい。

## 北斗星（8月1日付）

秋田魁新報 2016年8月1日

第2次大戦中、ヒトラー独裁の下でナチス・ドイツは非道の限りを尽くした。600万人のユダヤ人を虐殺したホロコーストはナチス犯罪の象徴とされるが、その陰になって「忘れ去られた悲劇」と呼ばれてきたのが安楽死政策である▼ナチスはゲルマン民族の優生を維持し、理想の社会をつくるなどとして障害者や難病患者らを組織的に殺害した。ガス室に送られるなどして犠牲になった人は、幼児から高齢者まで20万人に上るとされる▼この悲劇を思い起こさせたのは、相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件である。19人の障害者を刺殺したとして殺人容疑などで送検された元施設職員の男は、今年2月の緊急措置入院中に「ヒトラー思想が降りてきた」と話したという▼入院させられる直前には、衆院議長宛てに手紙を渡そうとしていた。「私の目標は（複数の障害がある）重複障害者の方が安楽死できる世界です」。手紙には障害者への強烈な差別意識がにじんでいる▼「障害者の面倒を見ようと思い施設で働いた」という男が、ここまで急変したのはなぜなのか。事件の全容解明にはこの点の分析が不可欠だろうが、個人的感情による特異な事件という視点だけで捉えてはならない気がする▼2年前にドイツのベルリンにある安楽死犠牲者慰霊碑を訪れた際、ナチス犯罪の研究者が語っていた。「犯罪を生んだ社会的土壌の検証なくして本質は見えてこない」。改めてその言葉の重さを感じている。

